2019 年度　文学研究科評価分科会　点検・評価報告書　創価大学

第４章　教育課程・学習内容

（１）現状の説明

点検・評価項目①：教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか

文学研究科は、人類の在り方そのものを根源的から問うような精神的・文化的・社会的問題を対象に、まずそれに関する必要かつ十分な知識を修得した上で問題の所在を明らかにし、論理的・創造的な分析・思考によって自立的に解決を図ることができるよう、教育課程を編成している。

＜博士前期課程・修士課程＞では、高い言語能力、基礎的かつ広範な専門的知識、および問題発見力・論理的思考力・創造的解決能力を養うため、有機的な連関をもたせた体系的な教育課程を編成している。すなわち、専修ごとに基礎知識・研究方法を身に着けるコースワークを設定し、その上で高度な文献読解、専門的知識の獲得、論理的創造的思考を養う外書購読、特論、演習を配置している。

＜博士後期課程＞では、複数教員による多角的な研究論文作成指導を中心とする教育により、先端的な知識、新たな領域を開拓するような創造的思考、自立的な研究姿勢を養うような教育課程を編成している。すなわち、文学研究科全体を対象としたコースワークである特別研究指導を設置して自立した研究者としての態度・心構えおよび他領域の研究方法や知識を習得した上で、専攻ごとに全教員が論文指導に関わるような体制を構築し、特殊研究指導によって指導教員が深く専門分野について指導するという編成をとっている。

具体的には、以下の通りである。

《英文学専攻》

英語英米文学専修という専修名が表しているように、英米文学、英語学のどちらか一方に偏ることなく、オールラウンドな視点に立って研究することができるよう授業科目を編成している。英米文学関係では、詩、小説、演劇の各分野を総合的に研究する。文学研究はまず、個々の作品の原典そのものの精読を基本とし、歴史的、文化的、社会的な側面との関連を視野に入れ、さまざまな文献資料を駆使しながら分析力、構想力などを養う。その上で論文発表、学会発表など成果をあげるよう指導する。英語学関係では、英語学研究の大きな流れを把握し、学生の関心を考慮しつつ進めていく。文献等の精読を基本として、出来る限り英語と日本語との対応にも目を向け、議論を通じて、理解し、分析し、構成する力を高めていく。

《社会学専攻》

社会学は、社会科学がカバーするあらゆる領域を対象とし、さらに哲学や歴史学など人文科学の領域にかかわる研究動向からも強い影響を受ける。また、グローバル化によって、従来には存在しない新しい問題群に向き合う必要性も生まれ、こんにちの社会学は研究対象が以前にも増して幅広いものとなっている。《社会学専攻》に開設したグローバル・スタディーズ専修では、これらの時代的要請に応えることができるように、体系的に研究が進められるようにしている。まず研究の基礎となる学術的知識・方法の学習が大切と考え、「社会学基礎論」と「グローバル・スタディーズ基礎論」を必修としている。また大学院生の研究の

方向性に柔軟に対応するため「社会学研究法」と「グローバル・スタディーズ研究法」を選択必修としている。そのうえに、各セメスターにおける「演習」の必修を中心に、学生が研究目的に応じた選択科目を履修できるように科目を配置している。これらの科目履修を基礎として、各自の研究テーマに基づいて修士論文（ あるいはリサーチペーパー） を作成する。

《教育学専攻》

教育学専修では、博士前期課程においては、教育学原典購読と教育学研究法を通して教育学の基盤を学びつつ、教育方法学、教育行財政学、比較国際教育学、教育工学などの領域の他、国語教育論、算数教育論、社会科教育論などの教科教育についても、特論を通して探求できるように科目を配置している。また、演習では2人の教員の科目を履修することとし、専門性を深めつつも、他の領域にも目を向けることができるように配慮している。博士後期課程においては、演習において、博士論文作成を目指し、各自のテーマに基づき研究の進捗状況の検討、内容の精査を行っている。博士論文という大きなテーマのもとで複数の研究を統合するために、俯瞰的な視点を持ち、学術的・社会的な意義について常に精査することにより、高度な専門性を有する研究者養成を目指している。また、教育学の分野では、文献研究を基盤とすることが多いことから、当該分野のみならず、関連する領域についても見識を深めることを重視している。臨床心理学の分野では、質的データを扱うことが多いため、客観的な検証に耐えうるデータの収集、分析、解釈が妥当になされているか、徹底して検討している。臨床心理学専修では、臨床心理士としての実践力を身につけられるよう、臨床心理学の特論演習を通して基礎力を高めつつ、面接法や査定法、投影法、心理統計法、人格心理、発達臨床心理、精神医学などを通して、臨床心理学の知見を広げられるように科目を配置している。実習科目（臨床心理基礎実習、臨床心理実習）では、座学で学んだ知識をもとに教育や医療機関等の現場で児童・生徒や病院の患者と接することにより、心理援助職としての態度、心構えを身につける。また、附属心理教育相談室において、スーパーバイザー（指導教員及び指導相談員）の指導のもと、学外の来談者に対してカウンセリングを行う。その内容については、各回で録音した面接内容を逐語にし、スーパーバイザーの指導を受けるとともに、臨床心理実習I、IIにおいて院生、教員全員で事例検討を行い、事例理解と自己理解を深め、心理援助職としての資質向上、涵養に努めている。

《人文学専攻》

哲学歴史学専修・日本文学日本語学専修・仏教学専修の３専修において、博士前期課程においては、各専修の基礎科目として、当該専修の導入となる研究法２単位を必修の基礎科目として設置している。さらに選択必修の基礎科目として、哲学歴史学専修では、英語・フランス語・ドイツ語・中国語の「外書研究」の科目を設置しており、日本文学日本語学専修では、「日本文学文献研究」「日本語学文献研究」の科目、仏教学専修では、サンスクリット語・仏教梵語・中国語・日本語古文書の「仏教文献講読」の科目を設置している。そして、各専修の先進的学術成果を学ぶ専門科目として、選択必修の特論科目を設置している。また、リサーチ能力や社会的・職業的自立を図ることを含め、２年間にわたって専門の領域を継続的に学ぶために、「人文学演習Ⅰ～Ⅳ」の科目を必修科目として設置している。

《国際言語教育専攻》

本専攻は第２言語習得という国際化に対応した教育者を養成する目的のもと、「日本語教育

専修」と「英語教育専修」の２つの専修を持っている。両者ともに、優れた言語教育者の育成という観点から、理論・実践・研究においてスキルアップ、レベルアップできる能力を身につけるという教育課程の編成・実施方針に基づき教育内容を提供している。
＜日本語教育専修＞
日本語教育専修では、日本語教育や日本語研究における基礎理論や基礎知識を修得するための「基礎科目」、それらの諸問題を解決するための調査・研究を進める「演習科目（研究指導）」、日本語教育の実践を前提にした「演習科目（実践演習）」と日本語教育を実践する「実習科目」、その他日本語教育に関わるコミュニケーション理論や語彙・表現、教材研究などの「専門科目」を設けている。「基礎科目」にある「第二言語習得理論Ⅰ、Ⅱ」４単位、「日本語教育研究法Ⅰ、Ⅱ」４単位、「日本語教授法Ⅰ、Ⅱ」４単位の計１２単位は全て必修である。そのうち「日本語教授法Ⅰ、Ⅱ」は、初級から上級にわたる代表的な日本語教科書の分析と教授法を学ぶ概論科目であり、「日本語教育研究法Ⅰ、Ⅱ」は日本語教育分野の基礎理論と応用的な研究を主に文献講読を通して学び、理解力や批評力を養う。また、多様な研究テーマと具体的な研究方法を学ぶことができる。「演習科目（実践演習）」に設けられている「日本語教授法実践演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」では、初級・中級・上級の日本語授業の参与観察に基づき、レベル別の教授法を学ぶこととなっている。そして、「実習科目」にある「日本語教育実習」は学内の日本語・日本文化センターで、「海外日本語教育実習Ⅰ・Ⅱ」は海外の大学で、実際に日本語教育を行うものである。
＜英語教育専修＞

点検・評価項目④：学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか

《教育学専攻》
教育学専修では、全ての教員と学生が参加して 2 年次の 7 月下旬に修士論文の中間発表会を実施している。発表と質疑応答を通して、2 年生は、自身の研究の妥当性や進捗状況を確認するとともに、指導教員とは異なる分野の考え方やアプローチを学ぶことができる。また、1 年生は、発表と質疑応答のあり方や研究の進め方について、実例を通して学ぶことができ、教育上の効果が見込まれる。
臨床心理学専修では、教育学専修と同様の中間発表会を、2 年次の 6 月ならびに 10 月に実施している。さらに修了前の 3 月頃、修士論文発表会を全教員・学生の参加で実施し、学生の総合的考察力ならびにプレゼンテーション力の一層の育成を図っている。会の運営を１年生が担うことで、学術的な実践力の向上につなげている。加えて、臨床心理学の知見の深化と実践力の向上のために、臨床心理基礎実習や臨床心理実習などの科目を通じて、知識の確かな習得や総合的な検討力の強化を図るとともに、仕事に従事していくことについての生産的な自己検討を促している。具体的には、心理教育相談室でのケースの担当や陪席体験を通したケースマネジメント力の涵養、毎週 2 時間（年間 30 回）のケースカンファレンスを通した言語化能力とケース分析力の育成、病院実習（10 か月間、毎週 1 日）での現場に則した指導が挙げられる。
《国際言語教育専攻》
日本語教育専修では「院生発表会」を年に３～４回実施している。発表会は、修士論文の作

成段階に従って、1 年生は「構想発表」、2 年生は「中間発表」並びに修士論文提出 2 か月前に「直前発表」を行い、専任教員全員そして院生全員が出席し講評並びに質疑応答が行われる。また、会の運営は 1 年生が担う。

点検・評価項目⑤：成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか

文学研究科の博士前期課程・修士課程における修士論文審査においては、専攻・専修ごとに数項目の評価基準とその点数を明示している。博士論文審査においては、評価基準を明示している。

また、博士論文提出に至る過程および提出の条件を明確にし、博士学位認定の客観性、厳格性を高めた。具体的には、以下の通りである。

（1）審査の過程における公開の「博士論文資格審査会」を文学研究科として開催する。

（2）「博士論文資格審査会」での質疑を経て、博士論文提出者の十分な学力、および博士論文としての審査基準を満たしうると認定された者を、「博士学位請求論文提出資格者」（Ph.D. Candidate）とする。

（3）学位論文を提出前には、次の a または b の条件を満たすこと。

a 国際的または全国規模の学会・研究会等の学会誌、またはそれに準ずる学術刊行物に、査読を経た研究論文を 1 本以上掲載、または掲載が決定していること。

b 国際的または全国規模の学会・研究会等において、2 回以上の口頭発表を行なう。かつ大学等研究機関の雑誌・紀要等に、研究論文を 1 本以上掲載、または掲載が決定していること。

（4）上記資格者が完成した「博士学位請求論文」が提出された場合、受理検討委員会を研究科長の下に組織し、受理の可否を検討する。

（5）受理検討委員会から受理相当との報告があった場合、研究科委員会の議を経て主査 1 名、副査 2 名の審査委員会を設置し審査に入る。副査のうち、なるべく 1 名は外部の方に依頼するようにする。

（6）審査委員会は、論文内容の審査、提出要件の検討を経て、提出者との最終試験を行い、審査結果を研究科委員会に報告する。

点検・評価項目⑥：学位授与方針に明示した学生の学習効果を適切に評価しているか

文学研究科においては、各専攻・専修の基幹的で継続的に開講される科目を中心に、各アセスメント項目にそった形のルーブリックを作成し実行している。そして、その結果を文学研究科評価分科会において議論し、学生指導や教育課程の編成に反映しつつある。

また、学生が参加した文学研究科評価分科会を開催し、教育課程についての学生の意見を聴取し、活発な意見の交換が行われた。

（２）　長所・特色

文学研究科はは幅広い研究分野から構成されており、共通性という点では困難な面もあるが、逆にこの特徴を生かしより柔軟で学際的な研究ができるように、コースワークを設定したり学位審査過程を変更するなど努めている。

《教育学専攻》

基幹科目である教育学原典購読、教育学研究法、教育学演習（Ia, Ib, IIa, IIb, IIIa, IVa）、臨床心理学特論（I, II）、臨床心理学特論演習（I-1, II-1, I-2, II-2）について、セメスター終了時に自身の学習を振り返り、アセスメントポリシーに基づいたルーブリックを用いて自己評価する機会を設けている。これにより、授業科目の単位をただ修得して終わりとするのではなく、学んだ内容を再確認するとともにその到達度を自己分析し、自身の学びを補強したり、分野･領域内外の他の学びへとつなげたりすることができる。

《人文学専攻》

人文学専攻では院生発表会を開催し、3 専修すべての教員全員・院生全員・有志学部学生が参加して、主に修士論文提出予定者がその論文構想を発表し、活発な議論をしている。

《国際言語教育専攻》

日本語教育専修では、「院生発表会」を年に３～４回開催し、専任教員全員と院生全員が出席する。発表者は演習担当教員以外の教員から評価やコメントをもらうことができ、また、先輩･後輩の発表を聞くことによって修士論文のテーマ設定や研究手法、考察のポイント、発表の仕方、レジュメの作り方など調査･研究に関するさまざまな専門的な知識や技能を身につけることができる機会となっている。

また、日本語教育専修の教育内容は、理論と実践のバランスを考慮している点が長所であり、特色である。

（３）　問題点

・博士論文審査の基準と水準

博士論文の審査基準について、現在ではいくつかの評価項目を提示している。これは博士論文という性質上、その論文が学術の発展に寄与できるか否か、提出者が自立した研究者であるか否か、が合否の重要な鍵になることを考慮すると、検討の余地がないともいえない。今後、修士論文・博士論文にふさわしい審査基準の設定、およびそれに基づいた具体的な採点方法を含めて検討したい。

・修士論文の点数の標準化

修士論文の点数について、専攻によってバラつきがみられる場合がある。これを客観的に標準化する工夫が必要である。

・文学研究科評価分科会の学生参加

2019 年度から始めた制度であるが、参加学生数が少なかった。にもかかわらず、学生からは有益な意見が多かった。今後は、参加学生数を増やすように努力し、より広範で有意義な意見を聴取していきたい。

《国際言語教育専攻》

　日本語教育専修では、学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置に課題がわずかに残されている。それは、審査基準に基づいた採点の具体的な実施が課題で

あり、そのうえで最終試験の評点を決定する手続きについても明確になる必要があるように思われる。

第５章　学生の受け入れ

（１）　現状の説明

点検・評価項目①：学生の受け入れ方針を定め、公表しているか

文学研究科では、ディプロマポリシーに基づいたアドミッションポリシーを公開し、それに沿って入学試験を実施している。さまざまな需要にこたえて多様な入試試験を行っている。選抜方法は、各専攻共通問題・選択問題・語学問題・書類審査・面接などを通して、きめ細かく適切に多面的に点数化している。

《英文学専攻》

博士前期課程では、入学後には専門分野を研究し、その成果を英語で発表することが求められる。したがって、各々自分がとくに何に関心をもち、何を研究したいのかを早めに決め、英米文学、英語、文化、教育などについてなるべく広い知識及び応用力を身につけることが必要とされる。

博士後期課程では、高度な専門的職業人・創造的研究者の養成をめざし、博士論文の作成をもってその学業、研究の中心とするので、入学試験（および進学選考試験）ではそのような高度な研究を推進しうる基礎力、応用力をもっているかどうかが問われる。

《社会学専攻》

社会学専攻は、現代のグローバル化した日本や世界が直面する問題群の解決に寄与することのできる、高度な専門的知識・分析力・技能をもった専門家の育成を目的としているので、博士前期課程の入学試験では、研究意欲と基礎的な学力を、博士後期課程の入学試験では、創造的な知見を生み出す高度な研究能力を評価する。本学の建学の精神および上記目的に賛同し、深い学識とグローバルな視野からの分析力、理解力を身につけ、現代世界の諸問題へ創造的に取り組む意欲をもった学生を望んである。

《教育学専攻》

教育学専修では、博士前期課程、及び、後期課程が設置されており、激動する社会の中で、教育理論上の探究をベースとして人間をめぐる諸問題の解決を目指す人材を求めている。進路として、大学教員などの研究職の他、小中学校の教員や、教育学の知見を生かした職業に就くことを想定している。そこで、教育学研究の基礎力を測るために、英語と教育学を試験科目としている。

臨床心理学専修は、博士前期課程のみのコースである。本学は日本臨床心理士資格認定協会の第1種指定校になっており、修了後は臨床心理士試験を受験できることから、確かな基礎学力が求められるため、入学試験では英語の他、臨床心理学、発達心理学、教育心理学をカバーする心理学を試験科目としている。

《人文学専攻》

本専攻は、哲学・歴史・文学・語学・仏教の研究を通じて、広範かつ深い識見を養い、人間文化の創造的展開に寄与する人材の育成をめざしている。そうした人材像を掲げている本専攻には「哲学歴史学専修」「日本文学日本語学専修」「仏教学専修」の３専修がある。哲学歴史学専修では、文化の基底ともいうべき人間自身とその行為について、全体観の上から把握考察し、理念的にまた実証的に追究する。また、日本文学日本語学専修も、文学と語学という相互関連する学問を有機的に研究することで、人間文化の研究をめざ

す。そして、仏教学専修では、インドを発祥とする仏教の文献学的、思想的な研究を通して、人類の平和・文化に貢献することをめざしている。

博士前期課程の入学試験では、以上のような学問を研究する意欲と基礎力が問われる。また、博士後期課程の入試では、高度な研究を遂行しうる能力が問われることになる。

《国際言語教育専攻》

＜日本語教育専修＞アドミッション・ポリシーは、『大学院要覧』『学生募集要項』、文系大学院ホームページで公表している。以下の通りである。

日本語教育専修では、次の３つの条件にかない、そのために必要な基礎的能力を有する人を求めます。

① グローバル化する国際社会において、責任ある立場で日本語指導を担うことができる専門的知識と実践的技能の修得を目指す人。

② 教育機関で専門的な日本語の指導ができる言語教育の専門家を目指す人。

③ 日本語教育の実践の中で生まれた課題について、学問的な観点から探求し、研究の一層の深化を目指す人。

以上の３つの観点から入学試験を実施します。一般入試では、筆記試験の専門科目により日本語学・日本語教育における基礎知識・技能を評価し、外国語科目により外国人学生は日本語指導が可能な水準の日本語能力、日本人学生は学問的探究が可能な水準の外国語能力を評価します。面接では、問題意識、研究計画、学問探究の資質等を評価します。外国人入試においては出願資格として日本語能力検定試験 N1 合格を求めたうえで、一般入試の筆記試験および面接と同内容・同水準の口述試験を実施し、評価します。

（２）　長所・特色

国際言語教育専攻英語教育専修には多くの外国人学生が入学を志願してくる。本専修では、書類審査・民間英語試験成績などきめ細かく点数化し、最終的には最後の面接を重視している。

（３）　問題点

・入試問題の公開

入試問題を公表してほしいとの意見もあり検討しているが、学術分野が細かく分かれているために、特定分野の問題が毎年作成される訳ではなく、また受験学生の研究テーマに合わせて出題する場合もあり、どこまで遡って公表するのかなど難しい点がある。

・外国人試験

外国人の入学希望者が増加しているが、日本語能力に問題がある学生もみられる。英語トラックであればよいが、すべての専攻がそれに対応している訳ではない。今後、どのように対応するか検討が必要である。

第９章　社会連携・社会貢献

（１）現状の説明

点検・評価項目②：社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか、また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか

《国際言語教育専攻》

日本語教育専修

　学内の日本語・日本文化センターにおいて、院生の研究成果を現職の日本語教師に対して発表するというセミナーを開催し、調査・研究した成果を現場の教育に還元する機会を設けている。